

# ミステリー小説で見るスウェーデンの福祉

ばおぼぶ代表 五十嵐正人

## 第5回（最終回） ヨハン・テオリン バタフライ・エフェクト

連載の最後に取り上げるのはヨハン・テオリン作のエーランド島を舞台にしたミステリー小説だ。四部作になっていて、邦題には『黄昏に眠る秋』『冬の灯台が語る時』といった具合に四季が読み込まれている。

エーランド島については、ハヤカワ・ミステリ文庫『黄昏に眠る秋』の解説（千街晶之）に簡単な説明があるので抜粋しておく。

本書の舞台となるのは、スウェーデン南東、バルト海に浮かぶエーランド島である。スウェーデンで二番目に大きな島であり、本土とは長いエーランド橋でつながっている。観光地として知られ、島南部の農業地は世界遺産に指定されている。この島は著者の母方のルーツであり、子供時代には毎年夏を過ごしたという。

地図で確認すると首都であるストックホルムより南に位置し、遠く離れているようには見えない。しかしウィキペディアには「スウェーデンで二番目に大きい島でもあるが（一番目はゴットランド島）、スウェーデンの最も小さい地方である。島の住民の2万4628人の主な収入源は観光と農業である」と書かれている。首都であるストックホルムとはまるで異なる風土と言っている。そのせいか、これまで紹介してきた作品達とはまた違った味わいを感じられる四部作だ。

第1回で紹介した作家スティグ・ラーソンはスウェーデン北部のヴェステルボッテン生まれだが子ども時代を過ごした後、ストックホルムに移っている。そしてその作品『ミレニアム』シリーズの拠点であるミレニアム編集部はストックホルムに設定されている。第2回のレイフ・GW・ペーションはストックホルム生まれで、『許されざる者』の主人公ヨハンソンも『悪い弁護士は死んだ』のベックストレームも、ストックホルムの警察に勤務している。第3回のカーリン・アルヴテゲンは南部のスモーランド生まれだが、『喪失』の主人公であるホームレスのシビラはストックホルムの街をめぐらしている。第4回のラーシュ・ケプレルについては共同執筆しているアレクサンデル・アンドリルの方がストックホルム生まれであり、一連の作品の中心的な舞台はやはりストックホルムだ。

こうしたストックホルムを背景にしたミステリーに比べると、ヨハン・テオリンのエーランド島を舞台にした作品には、どこか牧歌的な匂いが漂っている。殺人事件が起こっているのに緊張感はあるものの、首都で見られるような殺伐とした空気感は薄まっている。こうした風土の違いからなのか、高福祉を蝕む新自由主義に対抗するためのヒントも、ストックホルムの場合とは違っているようだ。ラーシュ・ケプレルにおいては哲学にヒントがあった。施設や病院などの解体に象徴される高福祉を、単なる美談とたたづげる事無く、その本音ともいえる経済的事情を看破

する視点。その武器となっているのが現代の哲学にあるのだろうと、私には感じられた。施設解体と地域生活を善行として手放しに称えている日本の状況が、社会福祉の枠の中の閉ざされた思考の結果だとするなら、ラーシュ・ケプレルからのヒントは、経済や政治なども含めた社会的、人間的思考をもって社会福祉を理解し、監視する必要を指し示していた。第4回ラーシュ・ケプレルの項で引用した「やがて政府が新自由主義的な方向に傾き、大規模な経済危機が訪れ、気がついてみればどの県も、こうした人々をふたたびすくい上げる資金をもはや持ち合わせていなかった」(『催眠』ヘレンハルメ美穂訳 ハヤカワ・ミステリ文庫)という一文は、日本において福祉を考える私たちには警鐘として聞こえてくる。

哲学という知性を武器にした戦い方に対して、ヨハン・テオリンの作品から見つけれられるヒントはずっと素朴な方法だ。『冬の灯台が語る時』(三角和代訳 ハヤカワ・ミステリ文庫)にはこんなシーンがある。

次の瞬間、表の道で鈍いうなりが聞こえ、結露が凍って白くなった納屋の窓をライトが照らした。車が中庭に入ってきた。

ヨアキムは壁の穴を最後にちらりと見やってから、階段を降りた。

中庭に出ると車のヘッドライトで目が眩んだ。ドアがバタンと閉まった。

「こんにちは、ヨアキム」

きびきびしたその声には、聞き覚えがあった。幼稚園園長のマリアンヌだ。

「なにかあったのですか？」そう尋ねられた。

ヨアキムはとまどって園長を見つめたが、すぐに袖をめくって時計を見た。ヘッドライトの光ですでに五時半になっていることがわかった。幼稚園は五時に閉まる。ガブリエルとリヴィアを迎えに行くのを失念していたのだ。

「うっかりして……時間がわからなくなっていました」

「大丈夫ですよ。ただ、なにかあったのかもしれないと心配したので。電話をかけてみましたが、出られないので」

「ええ、ぼくは……納屋で少し大工仕事をしていたので」

「時間がわからなくなるのは、よくあることです」マリアンヌがほほえみを浮かべて言った。

「ありがとうございます。ふたりを送ってくださって」

「お礼は結構ですよ。どちらにしてもわたしはレールビに住んでいるので通り道です」彼女が手を振って車へもどった。「では、月曜日に」

何のことはない、幼稚園の迎えの時間を忘れていた父親と、子どもたちを送り届けてくれた幼稚園の園長との会話だ。ごくありふれた話だと思ふかもしれない。しかし、いったい現代の日本のどこに、こんな光景があるのだろうか。

たしかに、基礎構造改革以前の日本においては、私自身同様の風景を何度となく目撃してきた。私の場合は幼稚園ではなく、養護学校や障害福祉施設などの障害福祉の現場ではあったのだが。当時の社会福祉の中心は自立更生か、あるいは就労関係が大半で、生活支援に分類されるサービスは皆無に近かった。そのせいもあったのだろう、障害を持つ子ども達と遊んだり、障害者と旅

行に行くようなボランティア活動などが数多く見られた。ただしそれらは日本中で限なく実践されていたわけではない。学生中心のボランティア活動が盛んな地域は、どうしても大学などが存在している地域に限られていた。また活動の中心になる人材、多くの場合、熱心な教員や施設職員、保護者や当事者がいる地域でなければボランティア活動は育まれづらかった。基礎構造改革以前の日本には障害児者向けのボランティア活動が多く存在していたが、それらは偏在していて、皆無に近い地域もあったのである。この点については社会福祉のメニューに地域生活支援が書き込まれた事によるメリットがあったとっていい。余暇に関するボランティア活動は放課後デイサービスや、外出支援などに取って代わられることで、理論上は全国普遍のサービスとして提供されるようになったのだ。

しかしそれによって余暇の過ごし方が画一的になったことを忘れてはいけない。日本人なら当たり前前に存在している「もう一軒行こうか」という科白は、障害福祉サービスを利用する障害者の周りからは消えてしまった。あの頃見られたボランティアとの海外旅行の数もだいぶ減った気がする。生活支援のスタッフとの海外旅行などというサービス利用は、社会福祉の範疇を越えているものであり、おそらく想定されていないし、現実的にそれだけの受給量は提供されないだろう。もちろん生活支援が制度化されたからといって、ボランティア活動や、もっとベーシックな友達付き合いなどの制度外の人間関係が禁止されたわけではない。しかし制度化されたことで、家族以外の誰かと時を過ごす第一選択肢は、ほぼサービス事業者一色になってしまった。そしてそこには二番三番の選択肢は無く、多くの場合サービス事業者一択。支援費制度以前と以降では障害を持つ日本人の多くにおいて、その人間関係が変わってしまったのだ。家族と障害者同士という関係を別にすれば、友人やボランティアという人たちが消えて、学校等の教員や福祉事業者、医療関係者、行政関係者などの職業人に囲まれた一生を送ることになる。

現在日本の社会福祉の生活支援サービスが全てにおいて悪いと言っているのではない。良い点と同時に欠点もあることを理解し、対応をすることが必要なのだ。サービスを受けることで人間関係が狭くなり、時間の過ごし方が画一化された例はあったとしても、全国に一定の福祉サービスが提供される可能性が生まれたことは事実だ。しかし現実には可能性が生まれただけで、必要なサービスを受けられずにいる人がまだまだ存在することも忘れてはならない。大切なのは日本中に展開される社会福祉サービスと同時に、旧来の制度によらない人間関係の営みとが共存することなのだろう。その二者択一であってはいけないのだ。制度の生活支援が無ければ脆弱に過ぎるし、制度の福祉サービスだけではその画一性の質を新自由主義にコントロールされてしまう。

大切なのは、基礎構造改革以降駆逐されるように消えてしまった当たり前の人間関係と、それによる手助けを回復し、現行の社会福祉サービスと共存させることなのではないか。ヨハン・テオリンの作品は、そんなヒントを与えてくれているのだ。

当たり前の人間としての手助け。それはささやかな行為だが、実は新自由主義が嫌がる行動でもある。連載第3回で引用した有力な新自由主義者の言葉を思い出していただきたい。

いちばんわかりやすいのは、狂人の場合だろう。狂人に自由を認めたくはないが、しかし射殺したくない。誰かが自発的に狂人を住ませ世話をしてくれるなら大変ありがたいことであるが、そうした慈善事業的なやり方に頼ることは適切と言えるのだろうか。たとえば私が狂人の世話をすれば他の人が恩恵を受け、そこには測定しにくい外部効果が発生する。

この点を考えただけでも、慈善活動に頼るのは不適切と言えよう。こうした理由から、狂人の世話は政府を通じて行うのが望ましいと考えられる。

(『資本主義と自由』 ミルトン・フリードマン 村井章子訳 日経B P)

誰かが誰かを助けること。誰かが誰かに助けられること。その慈善活動的な貨幣経済が関わらない行為こそが新自由主義の最も怖れるところなのだろう。お父さんが迎えを忘れた園児を送っていくこと。親の仕事が長引いて家で一人留守番する子を隣近所の顔見知りが「お母さんが帰ってくるまで、お婆さんの家においで」と預かること。あるいは、障害者が参加するイベントが終わった時に主催者側だけで打ち上げに行くのではなく「一緒にいかないか」と当事者を誘うこと。なんだっていい。そうしたささやかな一つ一つの積み重ねが「測定しにくい外部効果」となって、世界を席卷しようとしている新自由主義の足を止めるのではないか。そんなこともまた、ヨハン・テオリンは教えてくれている気がする。

連載を振り返ると、現代的な社会福祉と古くから存在していた素朴な助け合いが共存している光景を、首都ストックホルムでも見ることができる。第3回で取り上げたカーリン・アルヴテューゲン『恥辱』(柳沢由実子訳 小学館文庫)のシーン。増えすぎた体重のために日常生活に支障をきたし、公的福祉の支援を受けて暮らす女性マイブリット。その家を支援のために訪れたヘルパーの女性エリノールは、ベッドから落ちて立ち上がれずにいるマイブリットの姿を見つける。とても自分一人の力で起き上がらせることは出来そうにない。

「わたし一人ではあなたを持ち上げられないと思うわ。ホーム安全センターに電話をかけなければ」

「やめて！」

恐怖からアドレナリンがどっと出た。マイブリットは手を伸ばしてベッドのヘッドボードの脚をつかんだ。

「ほかの人の手を借りないで。枕をあたしの背中に当ててちょうだい」

エリノールはすばやく動いた。(中略)三十分後やっと彼女は起き上がった。ホーム安全センターの助けを借りずに、男たちに触られずに彼女たちは二人でやりのけた。(中略)

彼女にはこんなことをしなければならぬ義務はなかった。規則どおり、ホーム安全センターに電話をかければよかったのだ。だが、彼女はマイブリットの望みどおり、そうしないで、二人でやりのけたのだ。

エリノールの行為は、社会福祉の規則から逸脱した行為だった。無事にマイブリットを起き上がらせることができたが、その過程で二人のどちらかが怪我などしていたなら、エリノールは上司から叱責を受け、場合によってはヘルパーとしての職を失うことになっていたかもしれない。しかし彼女は「すばやく動いた」のだ。大切なことは「男たちに触られずに」マイブリットを助けること。エリノールの目の前に横たわるのは、どれだけ大きく太っていても女性に違いなかった。エリノールはそれに気づき、それを大切にされた。社会福祉の制度下でのマイブリットが支援を必要とする障害者であったとしても。

このことはエリノールにとってマイブリットが障害者であるよりも人間であることを示し、同時にエリノールもまたヘルパーであるよりも前に人間であることを示している。エリノールが現代哲学の見地からこの行動をとったのかはわからない。しかし明らかに彼女は社会福祉の場において、その枠を超えた人間としての領域に立つ行動をとったのだ。それは哲学的であると同時に、エーランド島の幼稚園の園長にも通じる行為だといえるだろう。

その日の帰り際……。

エリノールは帰ろうとしていたが、急に立ち止まって振り向いた。  
「あのねえ、ベッドサイドテーブルの電話のそばに、わたしの携帯電話の番号をおいとくわ。  
またもし今日のようなことが起きたときのために」

ヘルパーがプライベートな番号を知らせるのは、もちろん禁じられている行為だろう。お互いに悪用の危険があるので、当然のことだ。しかし彼女はどうしようもなくなったマイブリットが自らホーム安全センターの男たちに助けを求めなければならなくなる、女性としての『恥辱』を思いやったのに違いない。そしてそれは人間としては自然な判断だともいえる。先に基礎構造改革以降の障害を持つ利用者の人間関係について書かせてもらった。それは著しく狭まり、先生やスタッフなどの職業人に囲まれた暮らしだ。私たちはその異常さに気が付くべきなのだ。社会福祉の支援を受けることの少ない一般的な日本人の部屋には、プライベートな番号がいくつもあるのではないかと。エリノールのプライベートな番号を書いた一枚の紙は、「測定しにくい外部効果」としてはあまりに軽く見えるかもしれない。しかしそうしたささやかな一つ一つが過度な新自由主義の脅威からスウェーデンの高福祉を、そして支援を受ける一人一人を護ることに繋がるのだろう。ただの偶然かもしれないが、カーリン・アルヴテグンには『バタフライ・エフェクト』という作品がある。バタフライ・エフェクト、蝶の僅かな羽ばたきが気象に変化をもたらすような。

今回の連載はいくぶん見切り発車で始めたため、終着点がはっきりしていなかった。それは不安な執筆過程だったが、筆者自身にも様々な発見をさせてくれるものだった。連載当初、スウェーデンの「ノーマライゼーション」を探る目的を設定していたのだが、連載のために読んだ数十冊のミステリー小説のどこにも、その本文の中に「ノーマライゼーション」という単語は見つけられなかった。あるいは訳の都合であって、原文には「ノーマライゼーション」という単語があったかもしれない。しかしそれにしても皆無というのは何故なのだろう。病院や施設などの解体への言及はいくつもあったというのに。

「ノーマライゼーション」という言葉の重要性が日本と、スウェーデンでは違っているのだろうか。あるいはスウェーデン国内において「ノーマライゼーション」という言葉に対する捉え方が社会福祉の専門家と、一般的な国民との間で乖離を持っているのか。連載を続けながら「ノーマライゼーション」を「高福祉」という特徴の薄い言葉に置き換えることになったのは、こうした気づきがあったためだ。

さて、私たち日本人には、今何が求められているのだろうか。スウェーデンのミステリー小説に描かれていた、福祉の枠の外から福祉を見てその欠点や危機に気づく哲学的な視点。あるいは

新自由主義を無効化するための「測定しにくい外部効果」の蓄積。日本の場合のそれは基礎構造改革以前にあった助け合いやボランティアなどの素朴な行為を、発展的に取り戻すことのように思う。繰り返しになるが、社会福祉の制度と人間としての手助けの共存に、私は可能性を感じている。

いずれにしても「ノーマライゼーション」を旗印に進めてきた基礎構造改革以降の社会福祉について、そろそろ本気で検証をするべき時に来ているように思う。何が実現されて、何が後退したのか。現在直面し、将来襲われるかもしれない脅威はなんなのか。ラーシュ・ケプレルが『催眠』に書き記した「やがて政府が新自由主義的な方向に傾き、大規模な経済危機が訪れ、気がついてみればどの県も、こうした人々をふたたびすくい上げる資金をもはや持ち合わせていなかった」というスウェーデンの現実、日本においては無視してかまわない心配なのだろうか。

今回はスウェーデンのミステリー小説から社会福祉の隠れた現状を読んでみたが、他の国や、日本のミステリー小説にも、多くのヒントが書かれているかもしれない。機会があれば読書の幅を広げてみたいと思う。

私にとっては、気づきの多い連載だった。

それにしても、スウェーデンのミステリー小説が内在している社会監視の意識には驚かされた。最後にヨハン・テオリンの『赤く微笑む春』に登場する議論の風景を引用しておく。ミステリー小説というエンターテインメントには似つかわしくない、オピニオン雑誌に掲載されているかのような意見のぶつかり合いだ。

「いや、わたしはスウェーデンでは税金を払わない」マックスが言った。「会社はこの国で登録されていないからな、ここの税金は高すぎる……それに、スウェーデンの税制を信用していない。あれじゃ人々を押さえつけているだけだね」

マックスはテーブルを見やって笑いかけているが、ヴェンデラはこの状況を収めなければと強く感じた。「もちろん税金はちゃんと払ってるじゃないの、マックス」

彼は妻を見て、笑みを消した。「どうしても必要があればな。だが、可能なかぎり少なくだ」

そしてマックスは、テーブルをかこむ誰もが同じ経済状況にあるかのようにグラスを掲げた。彼に負けにくいくらい大きな声が割りこんだ。「ぼくは喜んで税金を払いますよ」

クリステル・クルディンだった。

「ほう？」マックスが言った。「それで、きみはどんなお仕事を？」

「インターネット・セキュリティです」クルディンは簡潔に答えた。

彼もかなりの量のワインを飲んでいて、皿の隣にはほぼからになったボルドーの白があり、マックスを見ているのだがなかなか目の焦点を合わせられないようだった。

「あなたのような連中には吐き気がする」彼はそう続けた。

「なんだって？」マックスが言った。

「税金を払うまいとするあなたのような連中ですよ。そういうのには吐き気がするし、そんな戯言にもうんざりだ」

マックスがグラスを置いた。「わたしは戯言など……」

「つまりですね、あなたはスウェーデンの道で運転するでしょう」クリステル・クルディンは最後まで言わせなかった。

「なんだと？」

「あなたはここへ来るのに、エーランド橋を渡ったんじゃないですかね？」

マックスは顔をしかめた。「なにが言いたいんだ？」

「あのですね、税金であの橋ができたんですよ」クリステルは言った。「それに道も。それに、みんなが使うものも全部。学校。病院。年金」

「年金だと？」マックスが言った。「わたしに言わせれば、この国の年金など笑い事ではないな。それに医療も」

「医療は笑い事じゃない」テーブルの離れたところから声がした。「医療従事者の仕事ぶりはすばらしい」

ヴェンデラを見ると、それはパール・メルネルだった。

「そのとおりだ、ぼくたちは良質のサービスを受けている。自分の払った税金で」クリステルが言った。マックスを見て、続けた。「とにかくですよ、スウェーデンのすべてがそこまでひどいと思っているのならば、どうして他の国に行かないんです？」

いつの日か日本の国内でも、社会福祉への税金の支出を否定する論調が高まるかもしれない。その時にはっきりと反論できる論理を、私たちは磨いておかなければならないのだろう。

### ヨハン・テオリンのミステリー小説

『黄昏に眠る秋』 三角和代訳 ハヤカワ・ミステリ文庫

『冬の灯台が語る時』 三角和代訳 ハヤカワ・ミステリ文庫

『赤く微笑む春』 三角和代訳 ハヤカワ・ミステリ文庫

『夏に凍える舟』 三角和代訳 ハヤカワ・ミステリ文庫

※連載で取り上げた作家、ヨハン・テオリンとスティグ・ラーソンの作品が収録されている短編集があるので、あわせて紹介しておく。

『呼び出された男 スウェーデン・ミステリ傑作集』 ヘレンハルメ美穂・他訳 早川書房

ヨハン・テオリン『乙女の復讐』、スティグ・ラーソン『呼び出された男』がいずれもヘレンハルメ美穂訳で収録されている。

※※2024年7月現在、筆者が確認した入手可能な日本語訳を紹介した。

本連載を通じて、北欧のミステリー小説を手取る福祉関係者、社会福祉の現在に関心を寄せるミステリー小説愛好家が少しでも増えてくれたら幸いである。